

no.20

# CLC からしだね書店便り



8

2022  
August

CLC からしだね書店では…

- 1 キリスト教書が中心ですが、福祉、心理、精神、哲学、児童書、その他一般の良書もそろえています。
- 2 お洒落 でかわいい雑貨や小物もあります。
- 3 ブックカフェとして、ドリンクやスイーツ、ランチも提供しています。ゆっくり本を読みながら、お過ごしください。
- 4 コーヒーを飲みにきてくださるだけでもけっこうです。
- 5 図書コーナーも併設予定です。ドリンクを片手に、好きな本を手にとってお読みください。
- 6 古書のコーナーもあります。ほりだしものもあります。
- 7 読書会や著者を招いての講演会など、人と人との出会い、つながる「対話」の場を提供します。



「宗教二世」という言葉が聞かれるようになったのは、最近のことです。「エホバの証人」の親を持つ子どもたちが、世間の「ふつう」と自分の家庭の「ふつう」の間で悩み苦しむ現状を、ネットなどを通して訴え始めたのが始まりのようです。この訴えには、宗教を超えて、同じような境遇で育った人達から、共感する声が上がっています。

そして今、安倍元首相の殺害事件が、「宗教二世」の抱える問題を、のっぴきならない問題として浮き彫りにしました。カルトに苦しめられてきた家庭を放置してきた、いや、その苦しみを助長してきた政治の責任は大きいと思います。その一方で、特定の宗教を持つ家庭は、子どもにとって良くないというような、いささか行き過ぎた空気が生まれつつあることにも、不安を感じます。

私はこの事件が起こる前から、なんとなくですが「宗教」クリスチャンの父親に育てられた妹尾河童さんの自叙伝のような小説です。主人公の少年Hが、今話題になっているような意味での「宗教二世」だったのかどうか？と考えながら、この本をもう一度読み返してみると、なかなかおもしろいです。

少年Hのお母さんは、少年Hが家族のために一生懸命に調達してきた貴重な食料を、自分たちより貧しいお隣りの子どもたちにあげてしまいます。少年Hからすると、家族の愛よりも、母親の信仰による隣人愛が優先されたと感じ、悔しさと怒りとあきらめの気持ちで、家を出る決心をします。

子どもは無条件に、親のありったけの愛情を受けたいと願う生きものです。それは子どもの成長にとって、きつと必要なのなんだろうと思います。だから親は、そこに最大限の配慮が必要ですね。

ただ、子どもとしてではなく、「一人の人として」ならどうか？母親の「ささげる」という行為が、「従わないと罰が当たる」といった法律主義的で恐怖に支配されたものだったのか、それとも弱い立場にいる人たちを見過ごすことができない心の痛み（それはイエスとつながることでより強くなってしまう他者への愛といえるかもしれませんが）から出たものだったのか、その違いはその後の子ども心に、全く別方向の影響を与えるの

世」とか「宗教二世」とかいう言い方に、違和感をもっていました。「宗教」という言葉でひとくくりにすることへの違和感です。たとえば、お寺や神社に生まれた子どもは、「宗教〇世」という呼び方をするのか？欧米の何世代にもわたってキリスト教徒だった家庭に生まれた子どもは？

今、言われている「宗教二世」に定義があるとすれば、その国（地域）での大多数の人たちが行っている生活様式とは異なる生活様式を、親の「信念」によって、家庭の外でも強いられる子どもたちのことを指す、と考えればよいのかもしれない。そうすると、何も宗教に限ったことではない、かくれた「〇二世」が、他にもいることが見えてきます。また、「〇〇二世」の「二世」に込められたマイナスイメージは、「親から心の自由を奪われ、親の価値観を引き継ぐように強制された子どもたち」というように捉えれば、少し納得がいくのかもしれない。さて今回、読書感想本として取り上げた本は、「少年H」です。この本は、戦時下、熱心なクリスチャンの母親とやや冷めた？

ではないでしょうか。

子どもとしての自分は母親を許せない。でも、一人の人間としては、どうだろう？隣人の窮状を見過ごせなかった母親の行為を、ひとつの生き方として認めることができるだろうか？少年Hが突き当たった問題は、宗教二世の苦しみの体験談というよりは、子どもの自分と、大人になろうとする自分と、その狭間で葛藤する自立の物語のようにも思えるのです。

8月7日に放送されたNHK Eテレ「こころの時代」で、広島で被爆した近藤紘子さんが紹介されました。近藤さんは、牧師の父親が被爆者救済のために走り回る姿を見て育ったそうです。父親がなぜそこまで一生懸命だったのか、近藤さんがその理由を知ったのは、父親の牧師としての引退説教でのことでした。

「広島に原爆が落とされた日、牧師の私は、道々で苦しむ人を見捨て、我が子のことだけを考え、我が子のもとにまっしぐらに走った。その体験が、私を被爆者の方々のために生涯をささげるきっかけになった」と。

近藤さんは「父はあの日、私のことだけを愛してくれたのだ」ということ、それがとても嬉しかった」と言います。そしてそ

それが彼女自身の平和運動に対する思いを変えるきっかけにもなったそうです。極限状況で、子どものことしか考えられなかった父親が、その後、人として、牧師として、信仰者として、とても苦しんだのだということ。その胸の内を理解し認めたくえで、ただのエゴのかたまりになって我が子を最優先にしてくれたことに、娘である紘子さんの心は救われたのだと思います。

そう考えると、親は立派なお手本を示す存在であるより、失敗したり間違ったり、時に理不尽なことを要求したりする、ただの弱い親であつてもよいのだと、ちよつとほつとします。不器用ながらも、自分や家族や隣人のことを心にかけて、嘘、偽り、ごまかしのない生き方を貫いている、そんな親の姿を見ながら育つた子どもは、いつか親をちゃんと切り離して、自分の人生を生きていくことができるのだと、そんなふうに思います。

8月は戦争のことを考えるときです。少年日の時代、つまり戦時下では、大多数の人たちが行っている生活様式や教育の方向が異常で、家庭の中でひそかに行われている生活様式や教育の方向が正常だったりもしました。

「宗教二世」を「宗教一世」から守る法律が必要だということもいます。そうかもしれない。ですがその前に、今、私たちが「〇〇二世」「〇〇二世」と呼んでいるのは、どういう人の



京都のかたすみかから見た風景(5)

## 統一教会のオヤマダさんのこと

CLCからしだね書店 店長 坂岡 恵

今から35年ほど前のこと。四条通の烏丸から河原町にかけて、アンケートをとっている若者たちをよく見かけた。仕事帰りに一人で歩いていると必ず、「若者の意識調査のための、アンケートに協力お願いします」と声をかけられた。ある日、仕事が終わり、中途半端に時間が空いていたことと、この人たちはいったい何者なんだろう?という興味も手伝って、ついアンケートに応じてしまつたという事態を自ら招いた。

声をかけてきたのは、白い綿のシャツに紺色のタイトスカートというシンプルなスタイルの若い女性。「オヤマダと申します」と彼女は自己紹介した。

私は警戒心を持ちながらも、気がつくとおだやかに礼儀正しいオヤマダさんの質問に次々と答えていた。趣味だとか、好きな映画だとか、余暇の過ごし方だとかいった質問のあとで、「興味の ある本は?」というのがあり、そこには「仏典」「哲学書」等にまぎつて、「聖書」というのがあった。頭のすみで「これにまともに答える」と、面倒くさいことになるとは思っていた。「うーん、聖書ですかねえ」などと、自信たっぷりに答えていたのだった。

「聖書ですか...それは素晴らしいですね。じつは私も今、サ-

ことなのか?しつかり考えたいと思います。もし簡単に「宗教にはまる親から、子どもを守る」という大ざっぱな捉え方で物事を決めていくと、家庭の中で信仰を語ることをさえ許されず、国が家庭教育や家族のあり方にまで口を出して取り締まりを始めることにならないか?その一方で「日本古来の伝統的な文化と儀礼」と称するものを、学校教育に滑り込ませたりしないだろうか...

少年日は、「宗教二世」だったのか?  
この夏、親子で、話してみてもどうでしょう。

CLCからしだね書店 店長



この本も  
おススメ

クルで聖書の勉強をしているところなんです。すぐそのビルでやっているんですけど、ちよつとのぞいてみませんか?」

「いえ、私はクリスチャンで、聖書は教会で学んでいますから、けっこうです」

「それはすこいんです!たしか牧師さんの聖書講義のビデオがありました。少しだけ見に行きませんか?」

頭の中で「ますます危険だぞお」とアラームが鳴り響く。にもかかわらず、どうしようもなく青かった私は、彼女のあとについて行ったのだった。歩いて5分ほどの小さな雑居ビルの一室に、彼女が「サークル」と呼ぶグループの人たちがいた。たしか「Oアカデミー」とかいう看板がかかっていたと思う。狭い室内には何人かの若者がいて、ヘッドフォンをつけてそれぞれビデオを見ていた。

私もオヤマダさんに勧められるままに、一本のビデオを見た。牧師と名乗る男性が、ホワイトボードに「アダムとエバ」だとか「原罪」だとか「イエス・キリスト」だとか「十字架」だとかいった文字や図をバンバン書きながら、「キリスト教」について講義している。私の頭の中にある「キリスト教」からはずれていくようにも思えなかったが、一方的でたまたみかけるような話し

ぶりは、内容以外のところでどこかいやな感じだった。〇〇アカデミーは、やっぱりどこか怪しい。何をやっているところなのか見えてこない。そう思えたのは、私にキリスト教会というバックボーンがあったからなのかもしれない。

ただ、オヤマダさんは全然悪い人に思えなかった。まじめで優しい、遠慮がちな女性に見えた。だからオヤマダさんはここにいてはいけない、と私は思った。ビデオ視聴のあと、オヤマダさんに「感想を書いてください」と紙を渡されたので、私は一生懸命に私の信じる神様のことを書いた。さきほど見たビデオが間違っているというつもりはないが、神の救いは勉強とか講義とかで得られるものではなく、体験として私を生かすものだと思う、というような、わかったようなわからないようなことを、稚拙ながらも一生懸命に書いた。オヤマダさんの心に届いてほしいと願いがら。

オヤマダさんは、「えらい先生を紹介するので、もう少しお話ししませんか」と熱心に引きとめたけれど、「これから行くところがありますので」と、私はビルを出た。

オヤマダさんのために、もし私に何かできることがあるなら…と、今から考えると身の程知らずな熱意に駆られて、私は電話番号と名前を残して帰った。

数日後、オヤマダさんから電話があった。「知り合いの呉服屋さん、着物の展示会をやっているの、見にきませんか？目のと彼女が言うのに、私は曖昧に笑ってみせた。私が乗ったバスが出発しても、ずっと立って見送っているオヤマダさんの姿が遠くなるのを見ながら、もうこの人には会わない、と私は思った。中途半端な自分の浅はかさ、若さ、無力さ、敗北感みたいなものが、心のなかをいっぱいにした。

あとで教会の大学生にその話をしたら、

「アホやなあ。それって、統一教会やん。何を話したって、あの人らの心には届かへんで。だって、あの人らは余計なことを頭から追いつけ訓練をされてるんやから。下手したら、ミイラ取りがミイラになるし、近づかん方がいいよ」と言われた。

「たしかに私がアホでした」と、認めざるを得ない。にもかかわらず、ちょっとだけ悔しくもあった。まだ、心のどこかに、オヤマダさんとのつながりを切ってしまったことへの後悔みたいなものを引きずっていたのだ。オヤマダさんはやっぱりいい人だったのにな…と、彼女のちょっと困ったような笑顔を思い出しながら、教会の大学生のしくももっともな忠告にちょっと怒っている、どこまでもアホで悟りきれない私だった。

それから数年後、有名タレントやスポーツ選手が統一教会の合同結婚式に参加するというニュースが話題になり、高額な壺や印鑑を売りつける霊感商法も取りざたされ、マスコミはいっせいに

保養になりますよ」とのこと。当時、まだ呉服業界は景気がよく、着物の展示販売会もあちこちでやっていたので、これは〇〇アカデミーとは関係のない、本当にオヤマダさん個人のお誘いなのかもしれない、と、少しだけ期待して、私はこの二回かけて行った。

イベント会場を借りて行われる、ごく普通の着物の展示販売会のように見えた。オヤマダさんは、会場の入り口で、ここにこしなから私を迎えてくれる。それから、いかにもベテランふうになつと和服を着こなした女性販売員に案内されて、数百万円の値をつけた着物を、次々と見て回る「こ」になった。「これはお値打ち品です。きつとお似合いですよ」とけつこう強引に販売員は購入を勧めてくる。どう考えても社会人になったばかりの私が見えるような価格ではない。私が困った顔でオヤマダさんの方をみると、オヤマダさんは私と目を合わせずに「いい着物ですね」と販売員に相槌をうった。販売員は「ローンを組めば、毎日一杯のコーヒー代で買える」などというセールストークで迫ってくる。オヤマダさんは「コーヒー一杯で買えるなら安いですよね」などと、やっぱり私の顔を見ずに言う。これはもう、私の手に負えるような話ではないのだ、と思い知り、「こんな高価なもの私の身の丈にはあいませんので」とお断りし、販売員の手を振り切つて、早々に引き上げることにした。

オヤマダさんは、近くのバス停まで送ってくれた。道々、「またお会いしたいです。何かあったら、お誘いしてもいいですか？」

統一教会を叩き始めた。

韓国で行われた合同結婚式は日本のテレビで生中継され、どのテレビのチャンネルも合同結婚式を放映していた。気がつくとは、スタジアムを埋め尽くす気が遠くなるような数のカプルの中に、もうとつと忘れてしまったオヤマダさんの顔を探していた。狂気した一群の中に彼女の姿を見つつけられるはずもなかったのだ。

あの合同結婚式から30年の時間が経ったらしい。今、日本を揺るがす大きな事件が起こり、日本のいたるところに狡猾に根をはって力を蓄えてきた統一教会の30年間が問題となっている。私にもいろいろなお話があった30年。少なくとも今、幸せだと思える自分がいる。

オヤマダさんの30年はどうだっただろうか？今、幸せだろうか？二度と会えないオヤマダさんのことを思って、いまだに私は祈っている。

**クリスチャン新聞「福音版」9月号**は、いのちのことは社が、危機感をもって急遽発行した「統一教会」の特集号となっています。統一教会の「神」とキリスト教の「神」の違いがわかりやすく書かれています。元統一教会員がどうやって救出されクリスチャンになったのかという体験談も掲載されています。書店にも余分に確保していますので、ぜひお役立てください。



## サバイバルドリンクー B子さん

ー前編

今回の主人公はサバイバルドリンクー B子さんです。彼女は50歳で、大学生と高校生二人の娘さんのお母さんです。元夫は、犯罪で実刑判決を受け、収監されました。かねてから暴力を受けていたことも原因となり、子どもが小学生になる直前に離婚をしました。Bさんは、その頃から、うつ病や摂食障害を発症し、子どもの養育や自分の身のまわりのことができなくなりました。症状のひどい時は、実家の両親に二人の子どもの預けながら、ものすごく大変で不安定な毎日を過ごしていました。

### B子さんの「喪失」

自分で思い描いていた生活とは全く異なる現実、「こんなはずじゃなかった」とお酒の量がどんどん増えていきました。小学生の子どもたちにとっては、母親の関わりがとて大変な時期でしたが、子どもが寝てからお酒を浴びるように飲んで、明け方によくやく眠りにつく生活では、子どもたちを学校に送り出すことも、食事の準備をすることも、子どもをお風呂に入れたり、清潔な衣服を整えることもできませんでした。

入れるようになりました。

禁酒を一定期間継続し、両親や周囲の関係者から「子どもと一緒に暮らしを再開しても大丈夫なんじゃないか」と、お墨付きをもらうことができました。飛び上がりたいくらい嬉しい気持ちで、彼女は実家の子どもたちに電話をしました。「お母さんと一緒に暮らせたい」

### 再び「喪失」

喜びいっぱいB子さんの一言に対し、電話口の長女の返答は「お母さんとは絶対暮らしたくない。このままおじいちゃんとおばあちゃんと暮らしたい」でした。

長女にとって、泥酔したB子さんとの日々は、「お母さんとは暮らしたくない」と今でも言い切ってしまう程の大きな傷となっていたのです。自身の課題に向き合い、お酒のすっかかり抜けたB子さんを見て、長女の母親に対する不信感は変わりませんでした。

長女は自分の意思で、Bさんと離れて暮らすことを選択しました。Bさんは「長女に捨てられたんや」と、大きな「喪失」に飲み込まれそうになりました。そんなB子さんを支えたのは、次女が存在でした。お母さんとの暮らしを幼いながらに選択した次女のため、B子さんは良き母であるために、「喪失」から何とか立ち直り、母親として精いっぱい頑張るようになりました。

それを見かねた実家の両親が、B子さんの代わりに子どもたちを育てるために、半ば強引にB子さんを子どもたちから引き離しました。Bさんは、母親としての役割を果たせない自分に対する信頼、自分から子どもを強引に引き離れた両親への信頼、それに何も言わない支援者への信頼を「喪失」してしまいました。

彼女は誰も寄せ付けず、部屋の中に閉じこもり、アルコールへの依存がますます深刻になりました。

### B子さんの「希望」

アルコール依存症の治療では、同じ病気に苦しむ人たち同士で対話をする時間を頻繁に持ちます。他者の考えや助言に触れることで自分の病気に対する理解を深めたり、再び飲酒しないように、同じ課題に取り組む者同士で励まし合うのです。何度目かの入院で参加した「ピアサポートグループ(仲間どうしの助け合い)」でBさんは「長女が中学生になったら、3人で再び一緒に暮らします!」とみなの前で宣言しました。グループのみんなからは、とてもあたたかく励まされたそうです。

入院ですっかりアルコールを抜き、退院してからは、依存症の人たちが地域で回復を目指すための施設に頑張っているようになりまし。

今までは飲酒を隠すために、私が訪問してもほとんど中に入れてもらえませんでした。目標を宣言してからは、私だけでなく、訪問看護師さんやヘルパーさんなどの支援も受け

### あまのめいもがへんかへん

しかし、アルコール依存症はB子さんを簡単には楽にしてくれません。良い母親であろうとすればするほど、願いとかけ離れた現実の自分が突き付けられるのです。朝、思うように起きられない自分、子どもの学校行事に参加できない自分、保護費をうまく使えず親にお金の無心をしないといけない自分…。その現実に対して、お酒で苦しみを散らす方法しか、その時の彼女にできることはありませんでした。訪問時、子どもを盗んで飲酒をする彼女に「お酒飲んでるんやね…。」と確認すると「武山さん、お酒全部捨ててから帰って」とBさんが絞り出すような声で訴えます。何とか断酒ができるようにと願いながら、私は、家じゅうのお酒をかき集め、シンクに捨てました。苦しみながらお酒を飲むB子さんを見ていると、生きるため(サバイバル)には飲むしかないのかもしれない…。そんな複雑な思いにもなっています。

断酒は継続できなくても、飲んだり飲まなかったりを繰り返しながら、次女との二人暮らしを何とか継続していました。

次女が中学生になると、吹奏楽部に入り、休みの日も練習に出かけるようになりました。そして、B子さんとの時間よりも友人たちとの時間を優先するようになりました。Bさんは離れていく次女に寂しさを感じながらも、苦手な朝にきちんと起きて、お弁当を作り続けました。しかし、次女を学校に送り出してからは、お酒を飲んで寂しさ

来所とオンラインでの参加方法があります。  
参加費は資料代のみです。ぜひどうぞ!!



「からしだね館のひとこま担当  
武山より

# 「となり人」を考える会

様々な社会の破れで苦しんでいる人たちの「となり人となる」とは、どういうことでしょうか?  
バイステックの7原則をヒントにして  
人とのかかわり方を学ぶ

自分のところから  
他者のところへ

何とかしないと…といても今の自分に何ができるのか? 自分の内を振り下げるだけでなく、自分の外の世界に思いを向け、自分になかった考え方、自分の見たことのない世界に触れ、人とのかかわりについてたくさんの刺激を受けませんか?

**場所** 来所 (10名まで) とオンライン  
**参加費** 資料代実費  
**申込受付** 9月18日まで  
**申込先** 社会福祉法人ミッションからしだね  
担当 武山  
電話 075-574-2800  
メール takeyama@karashidane.or.jp  
申し込みの際は以下の項目についてお知らせください

- ・お名前・連絡先・参加方法 (来所かオンライン)
- ・この会を知ったきっかけ・その他 (連絡事項など)

2022年  
9月24日(土)  
14~16時  
第1回ゲスト  
JOCS会長  
畑野研太郎氏

第1回	9月24日(土)	14~16時	ゲストによる話題提供
第2回	10月22日(土)	14~16時	ガイドブックを用いた学びと意見交換
第3回	11月26日(土)	14~16時	ガイドブックを用いた学びと意見交換
第4回	1月28日(土)	14~16時	ゲストによる話題提供
第5回	2月25日(土)	14~16時	ガイドブックを用いた学びと意見交換
第6回	3月25日(土)	14~16時	ガイドブックを用いた学びと意見交換

ガイドブック「役割別 他人をたすけたい あなたの方・コミニニケーション」「知能・リソール」(丸川) (オレセッションプレッソングジャパン・C) 等ジャパン・社会福祉法人ミッションからしだねの選による刊行物) を事務局として学びます。

からしだね館では、障害のある方の生活全般の相談を受けたり、就労支援をしたりして、皆さまの障害のこと、福祉のこと、こんなことを聞いてみたい」ということがあれば、ぜひ、CLCからしだね書店 (clc@karashidane.or.jp) までお知らせください。



耐えがたい現実を、お酒の力で生き延びるしかないようなサバイバルドリンクのB子さん。彼女に「一体何が起ったのでしょうか。9月号に続きます。

「〇〇警察署で。」

次女は高校に進学し、アルバイトを始め、大好きな彼氏もできました。自宅には寝に帰るだけの生活になりました。コロナで学校に行けず、自宅にいる時があっても、スマホを片時も離さず、常にスマホの向こうの誰かとつながっています。親子の会話はほとんどなくなりまし。Bさんを訪問する度に酒量が増えています。話をしても記憶に残りません。そんな時に、1本の連絡が入りました。

「あ、そんなところか」。

を紛らわすようになりました。明らかにお酒の残った状態のB子さんに、次女が何を感じながら多感な思春期を過ごすのか…。何かあった時に、次女がSOSを出せるよう、次女にも声をかけながら訪問を続けました。

まだ値段がついていない本もありますが、おおむね、文庫本は100円、他の本も100円~定価の7割程度でお買い上げいただいております。(中には2円50銭という定価の本もあつたりしますが、それはまた別の話)



古書一覧リストページ

<https://karashidane.or.jp/project/job-assistance/clc-books/usedbook/usedbook-list>

皆さまからご寄贈いただいた古本・古書は、からしだねワークスで働く利用者や職員、ボランティアさんと、整理とクリーニング、値付け、登録などを分担して行っています。

中には、絶版になった貴重な本もあり、「あ、こんなところに、欲しかった本が…!」と、思わぬお宝を発見するお客様もおられます。

ご寄贈くださった方も、からしだねワークスで働く利用者さんたちの暮らしが支えられ、ふさわしい買い手のもとに本が届きますように、というお気持ちだと思いますので、他で高値がついている本も、定価以上の値はつけません。

◆HPの古書のコーナーをぜひ利用ください  
◆「古書一覧リストページ」から検索できます  
◆絶版の本もあります。おめあての本が見つからなかったら、ぜひご来店ください (念のため売れてしまっていないか電話かメールでご確認いただけます)

## 献本について お知らせ

たいへん申し訳ございませんが、  
送料をご負担いただくと  
ありがたいです。  
(受付できないものもありますので  
事前にお知らせください)

百科事典・辞書・CD・  
DVD・月刊誌・週刊誌等  
は受け付けておりません

### 【献本をお願いしたい本の種類】

- 1 キリスト教書、キリスト教に関連した本（多少、書き込み等があっても、大丈夫です）
- 2 哲学、心理学等、人の生き方に関する本
- 3 社会の中で起きている問題を扱った本
- 4 暮らし（料理、健康、経済等）にかかわる本
- 5 小説（人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません）
- 6 漫画（人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません）

### 【本の送り先】

住所：〒607-8216 京都市山科区勤修寺東出町75 からしだね館

宛先：CLC からしだね書店 献本係 電話：075-574-1001 FAX075-574-0025

Mail：clc@karashidane.or.jp

### 【本と一緒にいただきたいもの】

以下の内容を記入したメモ

①献本者のお名前②ご住所③お電話番号④メールアドレス⑤さしつかえなければ、献本者の簡単なプロフィールをお願いします。⑥献本くださった方のお名前を書店だよりにご紹介させていただきたいと思います。お名前の掲載は困るという方は、お知らせください。

【古本の売上を含む CLC からしだね書店の収益は、すべて、書店で働く障がい者の工賃になります】

### 【献本感謝】

橋川典子様、和田耕作様、松本勝様、細井あつ  
ご様、浅井省二様、小野美おん様、平林様、長谷  
川和雄様、匿名様（順不同）

7月の古書の収益は82,187円でした。  
収益はからしだねワークスの障がいを持つ  
利用者さんたちの工賃になります。ご寄贈  
いただいた皆様、ありがとうございました。

### 編集後記

◆先日、国際CLCの方とオンラインで情報交換を行いました。もうコロナは終わったかのような生活ぶりに、日本との温度差を感じましたが、ともに祈り合い、ここを通わせるひとときを持つことができうれしかったです。◆「6日・9日・15日」と、日本の8月は戦争と平和について思いをめぐらす月です。ウクライナをはじめ、今もいのちが危険にさらされている人たちのために祈りつつ、平和のためにできることを考えたいと思います。書店にも戦争と平和を考える本を置いています。◆暑い毎日、カフェでは、少しレトロなクリームソーダもご用意しています。冷たくて甘くて美味しいです。ぜひ足をお運びください。◆「主の平和」が、皆様お一人お一人のうえに豊かにありますように…。【店長】

編集・発行：社会福祉法人ミッションからしだね  
就労継続支援A・B型事業所からしだねワークス  
からしだね書店&カフェ・トライアングル

〒607-8216 京都市山科区勤修寺東出町75 からしだね館  
書店電話番号 075-574-1001 FAX 075-574-0025  
書店メール clc@karashidane.or.jp

CLCからしだね書店だよりの  
バックナンバーはこちらから

